

所属	心理学研究科臨床心理学専攻修士課程	修了年度	2022 年度
氏名	中村隆斗	指導教員 (主査)	杉本希映准教授

論文題目	青年期の両親間葛藤と情緒的安定性との関連—感情調節に注目して—
------	---------------------------------

本文概要

【問題と目的】

青年期に両親間葛藤に晒されることは、抑うつや自尊感情に影響を及ぼすことが示唆されており（山本・伊藤，2012），両親間葛藤に直面した際の子どものメカニズムを説明する理論として、情緒的安定性理論が提唱されている（廣瀬・濱口，2021）。また、虐待は感情や感覚の調節障害との関連が確認されており（西澤，2009），感情調節に影響を与えることが示されているため、両親間葛藤においても関連があることが予想される。ネガティブな感情の調整方略として、Gross（1998）による感情調節プロセスモデルがあり、再評価方略は適応的、抑制方略は非適応的な結果を導くこと、抑制方略は男性の方が使用していることが明らかとなっている（吉津・関口・雨宮，2013）。これらのことから、両親間葛藤と情緒的不安定性との関連には不適切な感情調節方略が介在していると考えられる。以上のことから本研究では、性別ごとに以下の仮説を検証する。仮説1：両親間葛藤が高いと、再評価方略は低く、抑制方略は高い。仮説2：両親間葛藤が高くて、再評価方略が高ければ情緒的不安定性は低くなる。仮説3：両親間葛藤が高く、抑制方略が高いと情緒的不安定性は高くなる

【方法】

大学生 218 名にオンラインによる無記名式アンケート調査を 2021 年 12 月から 2022 年 2 月に実施し、有効回答数は 192 名であった。調査内容は、①フェイスシート：学年、性別、居住形態、②夫婦間葛藤尺度（山本・伊藤，2012）、3 因子 20 項目 4 件法、③日本語版情緒的安定性尺度（廣瀬・濱口，2021）、7 因子 32 項目 4 件法、④感情調節尺度（吉津・関口，2013）、2 因子 10 項目 7 件法

【結果と考察】

男女別に、夫婦間葛藤尺度と感情調節尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した結果、「再評価方略」との関連は認められず、「抑制方略」については、女性のみ、有意な正の相関がみられた。したがって、仮説1の抑制方略については女性のみ支持された。仮説1について、「再評価方略」を検討している研究は、アスリート研究（牧他，2018）などが多く、両親間葛藤はネガティブ感情を有する出来事であり、さらに自分ではコントロールが難しい出来事であるため、「再評価方略」との関連が認められなかったと考える。女性は、両親の「葛藤の激しさ」を感じることで「抑制方略」を使用し、より不適応な結果を導く可能性が示唆された。

次に、従属変数を情緒的安定性尺度の下位尺度、独立変数を夫婦間葛藤尺度、感情調節尺度の各下位尺度として男女別で2要因分散分析を行った。その結果、男性のみ、情緒的安定性尺度の下位尺度と夫婦間葛藤尺度、抑制方略に有意な交互作用が認められた。したがって、仮説2は支持されず、男性のみ仮説3は支持された。仮説2、仮説3については、男性において両親間葛藤が高い時には、「抑制方略」を使用しないということが情緒的不安定性を高めないための介入となるといえる。一方、女性においては、夫婦間葛藤尺度と情緒的安定性尺度の関連が強く、感情調整方略は夫婦間葛藤尺度と情緒的安定性尺度の関係を調整していなかった。女性の場合、両親間葛藤が高い環境において、感情調節方略は機能せず、解決放棄をして両親と距離を取っている可能性があるが、適応的な対処とはなっていないため情緒的不安定が高くなってしまっているのではないかと考えられる。